ＮＨＫ交響楽団　公演

つのだ　こうすけ　指揮

なかの　りな　ヴァイオリン

実施び　202５年９月６日　土曜

1５時から１７時まで　とちゅう２０分の休憩あり

会場　埼玉会館 大ホール

これは、読み上げ対応用の文字プログラムです。

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

後援：さいたま市、NHKさいたま放送局

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）　独立行政法人日本芸術文化振興会

プログラム

１４時２０分から１４時３５分まで　指揮者つのだこうすけによるプレコンサートトーク

前半

モーツァルト作曲：オペラ、ドンジョヴァンニ序曲

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

ヴァイオリン演奏　なかのりな

休憩 ２０分

後半

ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調 作品67 「運命」

プログラム終わり

出演は

指揮 つのだこうすけ

ヴァイオリン なかのりな

管弦楽　NHK交響楽団

コンサートマスター ごうこ　すなお

出演者一覧終わり

曲目解説：しばた かつひこ

モーツァルト作曲：オペラ、ドンジョヴァンニ序曲

《ドンジョヴァンニ》は、現オーストリアのザルツブルクに生まれたウィーン古典派の天才、ヴォルフガング アマデウス モーツァルト（1756年生まれ１７91年没）の４大オペラ（他は《フィガロの結婚》《コジ ファン トゥッテ》《魔笛》）の第２作。1787年、前作《フィガロの結婚》が大当たりをとったプラハの興行主からの依頼によって作曲され、同年同地での初演も大成功を収めた。

内容は、女性とみれば手を出すスペインの伝説的貴族ドンファン、（ドンジョヴァンニはイタリア語名）、の放蕩ぶりと地獄落ちを描いたもの。劇的迫力と喜劇てき要素を併せ持つ、モーツァルト円熟期の傑作だ。

　序曲は、本編の雰囲気を凝縮した濃密な音楽。アンダンテ、ニ短調の序奏では、ドンジョヴァンニに殺された騎士長の石像が彼に改心を迫る場面の音楽が用いられ、緊迫感と不気味さが醸し出される。モルト・アレグロ、ニ長調の主部に入ると曲調が変わり、２つの主題を軸に明るく躍動てきな音楽が繰り広げられるが、ここもどこか緊張感を漂わせている。

チャイコフスキー作曲：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

　ロシアのたいかピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840年生まれ１８93年没）が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と共に同ジャンルを代表する名作にして、自身の《ピアノ協奏曲第１番》と並ぶロシアの看板協奏曲でもある。

　1877年夏に結婚し、直後に破綻したチャイコフスキーは、同年10月から翌年４月までヨーロッパで静養した。本作は1878年春に静養先のスイス・レマン湖畔のクラランで作曲された。チャイコフスキーは、若手ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・コテーク（コテックほかさまざまな表記あり）に紹介されたラロの《スペイン交響曲》（内容は華麗なヴァイオリン協奏曲）に刺激を受け、僅か１ヶ月ほどで本作を完成。そしてロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したのだが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまう。しかし作品の価値を見出したロシアのドイツ系奏者アドルフ ブロズキー（こちらも様々な表記あり）の尽力により、1881 年12 月ウィーンでの初演にこぎつけた。

その時は当地の大批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されたものの、ブロズキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、遂にはアウアーも進んで演奏するようになった。曲は、情熱と哀愁に充ちた聴きごたえ満点の音楽。協奏曲としては民族的な情緒が際立ち、チャイコフスキーならではの旋律美も大きな魅力を成している。重音その他独奏ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

第１楽章：アレグロ モデラート ・ モデラート アッサイ。のびやかでスケールの大きな第１主題と抒情的な第２主題を軸に進む長い楽章。序奏に続いて独奏ヴァイオリンがカデンツァ風に登場。華やかさと哀感が交錯しながら盛り上がり、技巧的なソロが縦横に繰り広げられる。

第２楽章：カンツォネッタ（＝小さな歌）、アンダンテ。愁いを湛えたト短調の緩徐楽章。弱音器を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わる。

第３楽章：フィナーレ、アレグロヴィヴァチッシモ。躍動てきな終曲。激しく始まり、ロシアの舞曲トレパーク風の歯切れ良い第１主題と、若干テンポを落として奏されるやはり民族舞曲風の第２主題を中心に進行。熱狂的な展開を遂げる。

ベートーヴェン作曲：交響曲 第5番 ハ短調 作品67 「運命」

ドイツのボンに生まれたウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770年生まれ1827年没）の代表作の１つであり、インパクトのある出だしで知られた、クラシック音楽の象徴ともいえる作品。“傑作の森”と呼ばれる創作中期の1807年から08年、対照的な曲調の第６番「田園」と相前後して作曲され、1808年12月22日アンデアウィーン劇場における自主演奏会で同時に初演された。

　なお、曲を特徴付ける「ジャジャジャジャーン」の４音＝「運命動機」を緊密に練り上げるまでには、かなりの推敲が重ねられた模様。また「運命」の愛称は、「ベートーヴェンが冒頭の４音を『運命はこのようにして扉を叩く』と述べた」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来しているが、彼の伝える話は捏造が多く、これも信憑性は低いとされている。

　ベートーヴェンは、９つの交響曲の１曲ごとに新機軸を打ち出したが、本作はそれがとりわけ顕著に示されている。全体としては、「ハ短調の第１楽章からハ長調の第４楽章へ」、すなわち「闘争から勝利へ」「暗から明へ」の構図が大きな特徴。そして、旋律ではなく４音の動機を軸に据えた稀有の発想、その「運命動機」が全楽章に登場して曲を統一する有機的な構成、

第３楽章の最後をクレッシェンドしたまま切れ目なく第４楽章に入る斬新な手法、交響曲史上初めて使用（第４楽章のみ）されたピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの清新な効果など、独創的な要素が満載されている。

第１楽章：アレグロ　コン　ブリオ。「運命動機」の連続によって緻密に構築されていく、緊迫感に満ちた楽章。第２主題は弦楽器で柔和に出される長調の旋律だが、その背後にも「運命動機」が鳴っている。

第２楽章：アンダンテ　コン　モート。雄大で美しい変イ長調の緩徐楽章。伸びやかな第１主題と、上行形の第２主題（伴奏リズムが「運命動機」）に基づく自由な変奏曲でもある。

第３楽章：アレグロ。いわゆるスケルツォの楽章。沸き出るような低音の主題とホルンで出される「運命動機」を中心とした主部に、低音弦楽器が激しく動く中間部が挟まれる。最後は不気味な音楽が徐々に盛り上がり、頂点で第４楽章へ移る。

第４楽章：アレグロ。輝かしい凱歌のような第１主題で開始。滑るような第２主題をまじえながら、果てしなく高揚していく。途中で第３楽章の回想を挟み、力強く華やかな終結に至る。

（曲目解説終わり）

出演者プロフィール

つのだこうすけ　（指揮）

東海高校卒業後、東京藝術大学大学院指揮科修士課程並びにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。2002年、安宅賞受賞。2008年、カラヤン生誕100周年記念の第4回ドイツ全音楽大学指揮コンクール第2位入賞。2010年、第3回マーラー指揮コンクールにおいて最終の6人に残った。これまでに、ベルリン・コンツェルトハウス管、ブランデンブルグ響、

上海歌劇院管、札響、山きょう、仙台フィル、群響、N 響、読響、都響、東響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、東京シティ・フィル、神奈川フィル、名古屋フィル、中部フィル、愛知室内オケ、アンサンブル金沢、京響、大阪フィル、日本センチュリー響、ひろ響、九響などと共演している。

　2015年よりセントラル愛知交響楽団の指揮者を務め、2019年より常任指揮者に就任。2016年から2020年　大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者、2018年から2022年 仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者を歴任するなど、いま日本で最も期待される若手指揮者の一人として各地にて活躍の場を拡げている。2016年「第11回名古屋ペンクラブ音楽賞」、2020年「令和元年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞」「名古屋市文化振興事業団第36回芸術創造賞」を受賞。

現在、セントラル愛知交響楽団音楽監督を務めている。

なかの　りな (ヴァイオリン）

2021年第90回日本音楽コンクール優勝。2022年第8回仙台国際音楽コンクールにおいて、史上最年少の17歳で優勝、及び聴衆賞を受賞し大きな注目を浴びる。以降、主要オーケストラとの共演やリサイタル等、演奏活動をはじめ、現在、最も将来が期待される若手ヴァイオリニストとして高い評価を得ている。

　2004年生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室にて森川ちひろに学ぶ。2015年よりザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学夏期国際音楽アカデミーにてポール・ロチェックの指導を受ける。桐朋女子高等学校音楽科を卒業後、現在桐朋学園大学「ソリスト・ディプロマ・コース」に特待生として在学し、辰巳明子に師事。

また、ウィーン市立芸術大学ではカルヴァイ・ダリボルに師事し研鑽を積んだ。ロームミュージックファンデーション2023年度及び2024年度奨学生。

使用楽器：1702年製アントニオ・ストラディヴァリウス〈ライアル〉（一般財団法人ITOHより貸与）

ＮＨＫ交響楽団　（管弦楽）

1926年10月に新交響楽団の名称で結成。1951年には日本放送協会（NHK）の支援を受けることとなり、NHK 交響楽団と改称。以来、今日に至るまで世界一流の指揮者・ソリストたちと共演し、歴史的名演を残してきた。2026年に創立100周年を迎える。2013年のザルツブルク音楽祭に出演するなど世界最高峰の舞台でも活躍し、2024年8月には台湾でツアーを行い、さらに2025年5月にはヨーロッパでツアーを成功させた。現在、年間54回の定期公演をはじめ、全国各地で約120回のコンサートを行い、その演奏は、NHKの放送や公式YouTubeチャンネルなどを通じて全世界にも紹介されている。また社会貢献活動として、全国の学校を訪問する「NHKこども音楽クラブ」、被災地や病院に安らぎと元気を届ける室内楽コンサートなど、多彩な活動を行っている。

（出演者プロフィール終わり）